

日の光を浴びて

(三) 水野仙子

クリスマスの裝飾に用ゐた寄生木の大きなくす玉のやうな枝が、ランプの光に枝葉の影を見せて天井に吊されてゐる。夜の色にその葉の緑は黒ずみ、可愛らしい珊瑚珠のやうな赤い實も眠たげではあるけれど、荒涼たる冬に於ける唯一の彩りが、自然の野からこの部屋に移されて、毎日どれだけ私の眼を慰める事であらう。しかしあの赤い水々した實は、長い／＼野山の雪が消えるまでの間を、神が小鳥達の糧食にと備へられたものではないかと思ふと、痛々しく鈍を入れた人の罪が恐ろしい。その時あの赤い小さな實がどんなにほろ／＼と雪の上にこぼれた事であつたらう！

病んでゐる胸には、どんな些細な慄えも傳はり響く。そして死を凝視れば凝視る程、何といふすべてが私に慕はしく懷しまれる事であらう。火鉢の火が赤いのも、鐵瓶が優しい響きに湯氣をたてゝゐるのも、ふと擡げてみた夜着の裏が甚しく色褪せてゐるのも、すべてが皆私に向つて生きてゐる——この年、この月、この夜——すべてが私にそれでいゝ！おゝ、外にはますます吹雪の暴れる事よ。

「あれが人世なのだ！」

「そして室内は？」

「これもやつぱり！」

私は戸外に耳を聳て、それから少し首をもたげて靜かな部屋の中を見廻しながら、自問自答をした。

○

ばかりと目を開いたら、朝が待ち構へたやうに硝子の外から私を覗いてゐた。夢と現の境ごろに、近くで一發の獵銃の音が響いたやうだつけ、その響で一層あたりが靜かにされたやうな朝である。

山を切り崩して、それに引添ふやうに建てられたこの家の二階からは、丁度迫らぬ程度にその斜面と空の一部とが、仰臥してゐる私の目に入つて来る。雪に蔽はれたその切り崩しの斜面に、獸の足跡が、二筋についてゐるのは、犬か何かゞ驅け下りたのであらう、それとも、雪崩れになつて轉げ下りて來た塊りの走つた跡でもあらうかと、そんな事を私は思ふともなく思つてゐた。

空は蒼かつた。それは必と風雪に暴れた翌朝がいつもさうであるやうに、何も彼も拭はれて清く青かつた。混沌として降り狂つた雪のあとの晴た空位又なく麗はしいものはない。地には光があり反射があり、空には色と霽ひとがある。空氣は澄んで／＼澄み切つて、どんな科學者にもそれが其處にあるといふ事を一時忘れさせるであらう。

その美しい空に奪はれてゐた眼を、ふと一本の小松の上に落すと、

私は不思議なものでも見付けたやうに、暫くそれに目を凝らした。その小松は、何處からか光を受けてるらしく、丁度銀モールで飾られたクリスマスツリーのやうに、枝々が光榮にみちてぐるりに輝いてゐた。

「朝日が出て來たのらしい。」

さう思つて私はまだ自分の眼には隠されてゐる太陽の笑顔を想像の中に探し求めた。けれども私はそれをさう長く待つには及ばなかつた。小松は刻々に輝きを増して行つた。そして、今までその背景をなしてゐた空は、その青さは、刻々に光の海と化しつゝあつた。

眩しいものが一閃、硝子を透して私の眼を射つた。そして一瞬の後、小松の枝はもう無かつた。それは光の中に光り輝く斑点であつた。太陽が、朝日が、彼自らが、山と空とを劃つた雪の線に、その輝く面を現はしかけてゐた。光は直線をなしてその半圓の周圍に散つた。彼を見ようと思へば私は眼をつぶらなければならなかつた。そのために幾度か瞼を閉ぢ／＼した。涙が徐にあふれ出でゝもう直視しようとはしない眼瞼に光を宿して止まつてゐた。

それは太陽の強烈な光線が私の瞳を射つたからではなかつた。反對に、光は柔かに私の胸に滲み入つたのである……。

「……いゝ、それでいゝのだ、たとひ私が明日死ぬとしても！ 一生

をかけて目指して來た私の仕事に少しもまだ手がつけられなかつたとて、たとひ手紙が書きかけであつたとて、糸を通した針がまだ半襟から抜かれなかつたとして、それで死んだとして、それでいゝのだ！ 一つ私がこの世から消されたつて、あの光は少しも變りなく照る。それと同様に、いつまで私がこの世に役に立たなく生きてゐても、やつぱり變りなくあの光は照る！」

あゝ、おてんとうさま！

私は起き上つて、折から運ばれて來た金盃のあたゝかな湯氣の中に、草の葉から搖ぎ落ちたやうな涙を靜かに落したのであつた。

(一九一九、一月)

【入力者注】

底本は総ルビですが、ふりがなは一部のみ残しました。

底本に行を合せるため、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本…讀賣新聞

大正八(1919)年二月九日朝刊

テキスト入力…小林 徹

公開…令和七年八月十九日

リンク…[水野仙子作品年譜](#)